

## 第2章 国技テコンドーの創造

テコンドーは漢字で跆拳道と書く。テ（跆拳道）は足を用いての跳ぶ、蹴る、踏むを意味し、コン（拳）は拳を用いて突く、砕くを意味する。そして、ドー（道）は精神修養の道を意味する<sup>1</sup>。



〈写真6〉国技テコンドー

そして、大韓テコンドー協会によれば、テコンドーは「男女老少の別なく、どんな武器も持たず、いつ・どこでも手と足によって防御と攻撃ができ、そして心身の鍛練を通して人間の道を歩かせる武道でありスポーツである<sup>2</sup>」と定義されている。

<sup>1</sup> 崔泓熙<sup>1</sup>、『総合本 跆拳道』、モランボンテコンドー道場、2000、p.15

<sup>2</sup> 大韓テコンドー協会、[www.koreataekwondo.org](http://www.koreataekwondo.org)、2010年1月3日

テコンドーは華麗な足技を中心にスピードを特徴とする素手武芸として、これまで競技化と大衆化が目指され、今日ではグローバルな国際競技スポーツとなっている。このテコンドーは、現在、韓国の「国技」とされている。

ここで言う国技とはハングルで국기と書くもので、「国立国語院<sup>3</sup>」の定義によると「国で伝統的に受け継がれている代表的な運動や技芸」とされており、「わが国のシルムやテコンドー、米国の野球、イギリスのサッカーなどがある」と種目をあげている。このように「国技」は、特にテコンドーのみを称する言葉ではないが、日常会話では良く使われる言葉である。テコンドーが国技になった背景について、前 IOC 副委員長で世界跆拳道連盟の会長であった金雲容は次のように語っている。

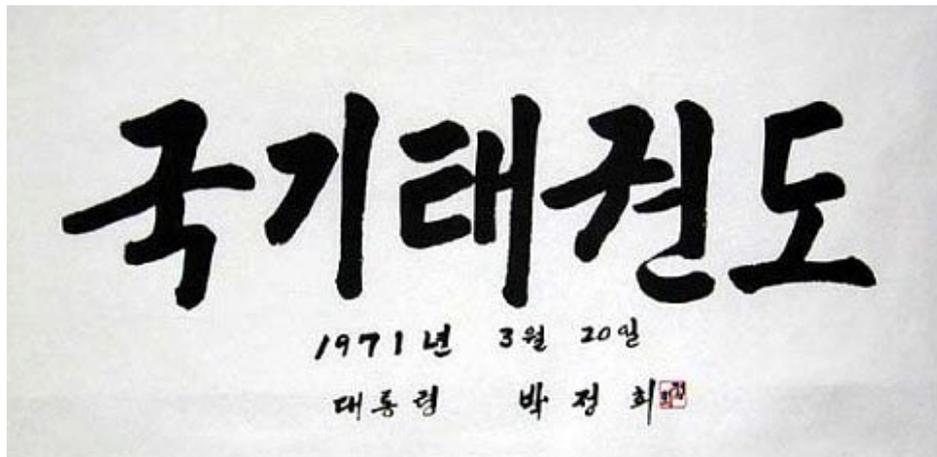
「テコンドー協会長になった頃、シルムやサッカーの関係者は自分たちのスポーツが国技であると主張していた。当時のテコンドーはいろんな面で弱かったので、私は（訳者注：1971年3月20日に）、朴正熙大統領に頼んで『国技テコンドー』と親筆揮毫していただいた。そしてこれを大量にコピーして、全ての道場に掛けるように命じた。このことがきっかけになってテコンドーは国技になった<sup>4</sup>」

この金雲容の発言によると、国技テコンドーの言説はテコンドー関係者によって人為的に創られたものであることが判る。

---

<sup>3</sup> 韓国の語文を研究する国の機関、国語辞典などを編纂。1991年設立。http://stdweb2korean.go.kr、2010年6月15日

<sup>4</sup> mooto media、www.mooto.com、2010年2月9日



〈写真7〉朴正熙大統領からの揮毫「国技テコンドー」

テコンドーの国内統一組織は 1959 年に「大韓跆拳道協会<sup>5</sup>」としてつくり、1966 年に「国際跆拳道連盟」(International Taekwondo Federation : 以下 ITF) が創設される。

しかし、ITF とは別に 1973 年に金雲容によって「世界跆拳道連盟」(World Taekwondo Federation : 以下 WTF) が設立され、この WTF が 1975 年に「国際オリンピック委員会」が統括する「国際競技連盟」(International Sports Federation) に加入した。そして、テコンドーは WTF の下に、1986 年にアジア競技大会の正式種目になり、2000 年のオリンピックシドニー大会からは、オリンピックの正式種目となった。

このテコンドーの起源について、これまでテコンドー関係者は、テコンドーはテッキョンを母体とするもので、韓国に古くから伝わり、その歴史的証拠は高句麗時代の古墳壁画や朝鮮時代の『武芸図譜通志』に収録されている拳法に見出されると説明してきた。

だが、こうした WTF テコンドー側の説明は、本論文の第 1 章において指摘したように歴史的に確かめられたものではなく、さらなる検証が必要であると考えられる。

むしろテコンドーという概念とその技法体系は、近代において初めて現れたものであり、韓国社会において新しい武芸として創造されたものなのである。

本章では、テコンドーについて、まずそれが第 2 次大戦後の韓国社会の中で生まれ定着していった過程を歴史的に明らかにする。そして、その歴史的考察を通して、テコンドーが空手という外来武芸から意図的に韓国の伝統武芸として創られていった典型モデルであ

---

<sup>5</sup> 最初「大韓跆拳道協会」が設立されたのは 1959 年であるが、現在の「大韓跆拳道協会」では「大韓跆拳道協会」から名称を変えて 1961 年に設立された「大韓跆拳道協会」を「大韓跆拳道協会」の前身としている。

ることを明らかにする。

## 第1節 テコンドー神話の誕生

テコンドーの起源について「大韓跆拳道協会」(Korea Taekwondo Association : KTA)は次のように述べている<sup>6</sup>。



「韓半島と中国大陸の東に位置する満州に展開した韓民族の部族国家では、迎鼓、舞天、東盟などと呼ばれた天を祭る祭礼において、歌舞や遊戯娯楽が行われ、これによって部族の団結と豊穡が願われた。

こうした大きな祭りでは歌舞や遊戯は自然に競争の形を取るようになり、いつしか古代ギリシャの祭礼行事であるオリンピックのような競技的性格を持つようになった。

部族の防衛と勢力拡大のために戦闘能力の向上が要請されると、その結果、天を祭る祭りの中で行われた身体活動が、闘技化されるようになった。

テコンドーはこのようにして、韓民族固有の闘技として生まれた<sup>7</sup>」



### 【古代時代】

「いくつかの部族国家が吸収・統合され、韓民族は高句麗 (BC37)、百済 (BC18)、新羅 (BC57) の3カ国に分かれて、中国大陸の東北部と韓半島を支配した。

<sup>6</sup> 本文のテコンドーの起源を述べる際、用いられた写真は、大韓テコンドー協会のホームページより引用したものである。

<sup>7</sup> 大韓テコンドー協会、前掲ホームページ

テッキョン、手搏と呼ばれたテコンドーは、武芸修練の基礎として、当時広く行われた。高句麗はソンベ、新羅は花郎という青少年集団教育制度を創案して、彼らは山川で武芸修練をした。古代のテコンドーに関する資料には古墳壁画、佛像、そして書籍の記録などがある。古墳壁画の1つはAD209~AD427年、当時の高句麗の都であった丸都城周辺の舞踊塚である。

この壁画は2人が一定の間隔を置いて向かいあい、手と脚で相手を攻撃するような姿勢が見られ、今日のテコンドーの動作と似ている。また新羅文化芸術の精華と呼ばれる石堀巖の金剛力士像や芬皇寺9層石塔の仁王象などの体使いはテコンドーの型を示している。

特に国家が滅亡して史料が消失した百済の場合は、日本書紀に百済の大佐平智積を日本が招いて日本の男と相撲を取ったとする記録があつて、当時の先進文化圏であった百済人が日本人に素手武芸を指導したことが判る<sup>8)</sup>



#### 【中世時代】

「高麗において三国時代に行われたテッキョン(テコンドー)は体系化され、武芸として武人の中で活発に行われた。

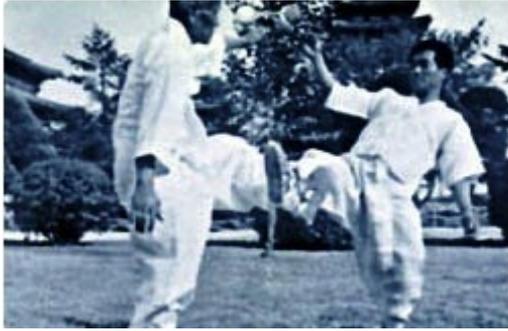
高麗史を見ると、テコンドーが手搏戯として記録されている。高麗史巻128、列伝41李義旼には、李が手搏戯に秀でていたので、王がこれを愛し、隊正から別将に昇進させたことが見えている。

また、王が常春亭に出御して手搏戯を観た、また王が和妃宮で手搏戯を観た、また馬巖に出御して手搏戯を観た、とする記録が高麗史巻36忠恵王にある。

高麗の手搏(テコンドー)は武芸としてのみならず、スポーツとして第3者が観覧するほどに体系されていたのである<sup>9)</sup>

<sup>8)</sup> 大韓テコンドー協会、同ホームページ

<sup>9)</sup> 大韓テコンドー協会、同ホームページ



### 【近世時代】

「朝鮮時代に入っても高麗のように武人の間では手搏戯(テコンドー)が引き続き盛行したが、さらに一般庶民の間でも競技が行われるようになった。

全羅道と忠青道の間にある小さい村でも両道の人々が集まって手搏戯によって勝負をしたという記録から、当時手搏戯は武芸だけではなくスポーツとしても行われたことが判る。

また、『太宗実録』巻19には「兵条では手搏で競い合って3人を倒した者を防牌軍に抜擢した」とする記録や、「王が宴を開いて兵士に手搏戯を行わせ、これを観た」(『太宗実録』巻32)とする記録もある。

それだけではなく、手搏戯は実践でも使われた。

『奇齊雜記』巻7「壬申日録」には、金山で敵(倭兵)が襲ってきたが、義兵は武器がなくなったため素手の手搏戯で敵と対決したとする記録がある。

さらに朝鮮時代のテコンドーに関する史料の1つとして、正祖の時に刊行された総合武芸書『武芸図譜通志』の中の拳法編が挙げられる<sup>10)</sup>



### 【現代】

「朝鮮王朝の国運の衰退とともに軍隊と武人は弱体化し、日本の強圧的な武力侵略によって韓国は植民地になった。日本による韓民族弾圧が強くなり始めると、抵抗の手段として用いられる可能性がある庶民の武芸修練は禁止された。しかし、テコンドー(テッキョン)は、独立軍や光復軍などの抗日組織の心身修練方法として、また個人的な武芸伝承意識によって、その命脈をわずかながらも民族の中に保っていた。

<sup>10)</sup> 大韓テコンドー協会、同ホームページ

8・15 解放後、忘れられかけていたテコンドーを再び取り戻すため集まった人々によって、後進が養成され、本来のテコンドーの姿が現れた。ついに 1961 年 9 月 16 日大韓テコンドー協会が創設され、1963 年 2 月 23 日には大韓体育会の 27 番目の加盟団体になり 1963 年 10 月 9 日には全州で開催された第 44 回国体の公式競技として初参加した。

今日では人類のスポーツ祭典であるオリンピックでも注目を浴びているテコンドー競技は、25 年前の 1963 年の全国体育大会をきっかけに競技規則と保護用具が飛躍的に発展し始めた<sup>11)</sup>

以上の協会側の説明によると、テコンドーは、三国時代に先立つ部族国家時代に部族の防衛のために行った格闘技として始まり、三国時代には「手搏」あるいは「テッキョン」とも呼ばれながら、武芸修練の基礎として行われた。テッキョンは高句麗の舞踊塚にも描かれ、また文献史料にも見えている。その後高麗時代に入り、三国時代に行われたテッキョンは、より体系化されて活発に行われ、文献には手搏戯と記された。そして、朝鮮時代に入っても手搏戯は兵士が身につけるべき武芸として盛んに行われ、他方民間でも娯楽として楽しまれたと主張している。

要するに現在のテコンドーは古く三国時代以前から存在したもので、手搏・テッキョンと文献上記される武芸が今日のテコンドーの原型であったと言うのである。

また、こうした WTF テコンドー側の論理は、テコンドーを国の無形文化財に指定申請しようとした際にも同じく用いられたものであった。

1968 年 11 月 6 日、ITF<sup>12)</sup>の事務総長であった許憲政が、文化庁にテコンドーの無形文化財指定申請書を提出した。申請のための『無形文化財調査報告書 テッキョン』に記された申請理由は次のようであった。

「1300 余年前の新羅時代から続くわが民族固有の武芸であるテコンドーは、時代の変遷と日本植民地政治の弾圧のために発展する機会を失い、かろうじて宋德基らの『テッキョン人』によって、その命脈が保たれてきた。

---

<sup>11)</sup> 大韓テコンドー協会、同ホームページ

<sup>12)</sup> 当時は、まだ WTF が生まれる前で、ITF が唯一の国際組織であった。

そうした中、崔泓熙将軍がその伝統を生かすべく、より広く技術を研究し、また理論を体系化したことで、テコンドーは今日のような科学的武芸として発展し得た。崔泓熙将軍は、新羅時代の名称であったテッキョンをテコンドーと改め、テコンドーが歴史的と技術的に我が国の伝統的な武道であることを立証するまでに至った。

そして崔泓熙将軍は、新羅時代のテッキョンと高句麗時代の手搏の技を基に、他の国には見られない足技と変化無限な手技を体得できる 23 の型（蒼軒流）<sup>13</sup>を創ったが、将軍はこの功績によって体育人として最高の荣誉である体育賞を受賞した。また将軍がテコンドーによって全世界に我が国の国威を宣揚した功労は大きいと認められるところから、テコンドーの無形文化財としての価値は充分にあると考えられる<sup>14</sup>」

許憲政はこのように、テコンドーの歴史的正当性に言及し、さらにテコンドーを集大成して世界に広めた崔泓熙の業績を無形文化財申請の根拠としてアピールしたのであった。

しかし、その申請に対し、審査委員であった芮庸海は、テコンドーが手搏とテッキョンを元に創られたとする歴史的根拠は低いことを指摘し、テコンドーの歴史性を認めなかった<sup>15</sup>。

それ以来、テコンドーを無形文化財に指定しようとする動きは見られなかったが、高句麗まで遡り、テッキョンや手搏と結びつける歴史的観点は、現 WTF 系のテコンドーの歴史観であって、韓国でも一般的な事実として理解されている<sup>16</sup>現状をまず述べておく。

また、WTF テコンドーのホームページ上で主張するところの『日本書紀』に記された百濟人と日本人が相撲をとった記録の原文は、皇極天皇元年（642）7月22日「乙亥 饗

---

<sup>13</sup> この報告書には、現在の 24 型とは異なって、淵蓋型のない 23 型が載せられている。

<sup>14</sup> 芮庸海、前掲書、pp.9~10

<sup>15</sup> テコンドーの歴史については、第 2 章でより詳しく説明する。

<sup>16</sup> シン ヨンホ、「韓国テコンドー近代化過程に関する研究」、檀国大学大学院 修士論文 2007。パク セドン、「テコンドーの発展可能性及び発展方向」、韓国教員大学大学院 博士論文、2004。ジャン テホ、「テコンドー発展過程と世界化展望」、慶北大学大学院 修士論文、2004 などの最近の論文にも、こうした論理で書かれている。

百濟使人大佐平智積於朝 乃命健兒相撲於翹岐前<sup>17)</sup>」と記されているもので、大韓テコンドー協会の主張とは異なるものであり、百濟人が日本人に素手武芸を教えたとする主張は、テコンドー側が日本との比較を通して自分たちの歴史的正当性を確保し、韓民族の民族的優越性を表わすために創られたものと見なされる。

## 1. 戦後における空手の流入

日本の植民地であった時期（1910～1945）に日本の武道は輸入されていた。柔道と剣道は主に学校体育の正課教材になり、また警察官の訓練としても行われ、韓国社会に広く行われていた。それに対して空手については、独立直前の時期に日本で空手を学んだ人たちが町道場を経営していたことが知られている。なお、当時韓国では空手は唐手、拳法などとも書かれた。

### (1)空手道場の動き

戦前、韓国において初めての空手道場は、李元国による「唐手道 青濤館」（1944）とされている。その後、黄琦の「鉄道局 唐手部」（1945、後に武徳館と改称）、田祥燮の「朝鮮錬武館 空手部」（1946、後に智道館と改称）、尹炳仁の「YMCA 拳法部」（1946、後に彰武館と改称）、盧乗直の「唐手道 松武館」（1947）が次々つくられたのである<sup>18)</sup>。

#### 1)唐手道 青濤館

青濤館は1944年9月15日、李元国によって唐手道という名を冠して開館された。李元国は1926年19才の時に日本に渡って松濤館に入門し船越義珍（1868～1957）から空手を学んだ。

李元国が韓国に戻り道場を開こうとした当時は、戦争の真最中であったため容易ではなかった。しかし、李元国は自分が日本の法務省の公務員として勤めた時に親交のあった阿部信行が、朝鮮総督府の総督（1944年から45年まで就任）であったため、その許可を得

---

<sup>17)</sup> 岩波文庫、『日本書紀4』、p.487、2009年4月15日第15刷発行

<sup>18)</sup> ジャン テホ、「テコンドー発展過程と世界化展望」、慶北大学大学院 修士論文、2004、p.24

ることができた<sup>19</sup>。

青濤館からは後に国武館、正道館、青龍館などの分館が生まれた。また、青濤館の師範の中には、後にテコンドーを立ち上げる崔泓熙が開いた空手道場の吾道館に朝鮮戦争後に招かれて指導した人も多くいた。

## 2) 鉄道局 唐手部

鉄道局唐手部は 1945 年 11 月 9 日、黄琦によって開館された。黄琦は南満州鉄道株式会社で日本人から唐手道を学んだ経験を持っていた。

当時の運送部（鉄道局）職員のクラブとして創られた唐手部（ソウル駅に設けられたのが最初）は、各地域の鉄道駅の施設を利用して勢力を拡大していった。そして、部員の多くも鉄道局の職員であった<sup>20</sup>。

鉄道局唐手部は、後に、修武揚徳の意味から武徳館と名乗っている。

## 3) 朝鮮錬武館 空手部

1931 年、朝鮮錬武館は最初柔道の道場として開かれたが、後の 1946 年 4 月 3 日に空手部もつくられた。

朝鮮錬武館の戦後における初代の館長であった田祥燮は青少年期には柔道を学び、また留学先であった日本の東洋拓殖大学で空手を学んだ経験があった。1940 年（43 年の説もある）に帰国してからは朝鮮錬武館で柔道と空手を教えたとされている。当時田祥燮が指導した空手は型稽古であった<sup>21</sup>。

その後、朝鮮戦争の際に共産党系団体に所属していた田祥燮が行方不明になり、尹快炳と李鐘祐が朝鮮錬武館を智道館と改称した。

## 4) YMCA 拳法部

YMCA 拳法部は 1946 年、ソウルの基督教青年会館（YMCA）に設けられた。初代の責

---

<sup>19</sup> テコンドー新聞、1998 年 9 月 14 日。但し、これはジョン ジョンギョ、「光復以後テコンドー時代変遷史に対する文献的研究」、慶熙大学大学院修士論文、2008、p.24 の重引である。

<sup>20</sup> ジョン ジョンギョ、前掲書、p.26

<sup>21</sup> テコンドー新聞、1997 年 7 月 21 日

任者である尹炳仁は、田祥燮の朝鮮錬武館空手部で指導員として空手を教えていた経験があった。

尹炳仁は幼い頃の 1930 年代、満州で中国武術を学び、そして戦前に日本に渡り日本大学留学中に修道館空手の創始者である遠山寛賢と出会った。2 人は武術を通して友好を深めたとされている<sup>22</sup>。この 2 人が弟子関係であったかについては確かでないが、遠山の著書である『空手道大宝鑑』（鶴書房：1963）に、5 段以上の高段者として尹炳仁の名前が挙げられている<sup>23</sup>。YMCA 拳法部は後に彰武館になる。

## 5) 松武館

松武館を創設した盧秉直は、日本留学時代に青濤館の李元国と共に船越義珍のもとで空手を学んだ。戦後自身の故郷であった開成で空手を教えたことをきっかけに 1946 年に道場を開いている<sup>24</sup>。

以上の 5 つの道場は、戦後の主な空手道場として、その後のテコンドーの形成に重要な役割を果たすことになる。

しかし、テコンドーの前身と言われる上記の道場は、当時自分の流儀を表わす言葉としてテコンドーではなく、「唐手」、「空手」あるいは「拳法」を用いていた。それは、テコンドーという名称がそれまでなかったためでもあったが、それよりもむしろ各道場の創設者が留学先の日本で学んだ空手をそのまま独立後の韓国に持ち込んでいたためであった。

こうした戦後の韓国の空手状況について、朝鮮錬武館空手部の 2 代目館長であった李鐘祐（元、国技院副院長、WTF 副総裁）は、次のように述べている。

「朝鮮錬武館は日本の植民地期に柔道の講道館の朝鮮支部であった。私が入門した当時は、・・・3 分の 1 は畳をはがして拳法部として空手を教えていった。また 3 分の 2 は柔道を教えていた・・・18 計が学べられると聞いて入ったが、空手を学んだ。日本語は全く使わず、空手も中国式拳法として教えていた。朝

---

<sup>22</sup> テコンドー新聞、1997 年 7 月 14 日

<sup>23</sup> MOOKAS、[http://mookas.com/media\\_view.asp?news\\_no=11029](http://mookas.com/media_view.asp?news_no=11029)、2010 年 1 月 14 日

<sup>24</sup> ジョン ジョンギユ、前掲書、p.29

鮮錬武館で教えていたのは拳による突きであった。蹴りはやらせなかった。型と1歩組み手、3歩組み手などを教えていた<sup>25)</sup>

つまり、独立直後に行われていたのはテコンドーではなく、日本の空手であったことは明らかである。

1945年、解放前後	1950年、朝鮮戦争	1960年代
青濤館（李元国）	青濤館（孫徳成、 嚴雲奎）	青濤館（嚴雲奎） 吾道館（崔泓熙） 正道館 国武館 青龍館
松武館（盧秉直）	松武館（盧秉直）	松武館
錬武館（田祥燮）	智道館（尹快炳、 李鐘祐）	智道館（李鐘祐） 韓武館
武徳館（黄琦）	武徳館（黄琦）	武徳館
YMCA 拳法部（尹炳仁）	彰武館（李南石）	彰武館 講徳院

〈表1〉戦後の韓国の主な空手道場<sup>26)</sup>

1945年、独立直後に胎動した上掲の諸道場は、互いに関係することなく独自に活動していた。しかし、1946年には創設者らは彼らの武芸の中の同一な特性を認め、それぞれに分かれている状態を統合して協会を創立しようとする動きが始まった。しかし、道場間の序列問題を含んだ意見の対立の結果、こうした努力は失敗に終わってしまう<sup>27)</sup>。

その後、朝鮮戦争（1950）が勃発し、臨時政府が設けられた釜山で各道場の関係者らは統合と協会の結成のため再び集まったが、相変わらずお互いの意見の差は大きかった。結

<sup>25)</sup> MOOKAS、[http://mookas.com/media\\_view.asp?news\\_no=11152](http://mookas.com/media_view.asp?news_no=11152)、2010年2月14日、

<sup>26)</sup> パク セドン、前掲書、p.14 参考

<sup>27)</sup> テコンドー新聞、1997年7月28日

局、行政官庁であった文教部体育課が仲介をして、1953年によく各空手道場が統合した「大韓空手道協会」が誕生した<sup>28</sup>。

しかし、この協会は無理やり統合を果たしたこともあって、創立から1ヶ月も経っていない内に、武徳館の黄琦が協会を脱退し、独自に「大韓唐手道協会」を創り、大韓体育会に加入しようとする事件が起きた。だがその企ては大韓空手道協会によって失敗に終わった<sup>29</sup>。

このように日本から独立してもしばらくは、まだテコンドーが現れる状況もなく、従来のように空手の道場が展開していた。

そして、さまざまに不協和音がある中でも統合して組織を作り、一致団結しようとする共通意識が芽生えたのは、空手界にとっては大きな転換期であったともいえる。さらに、大韓空手道協会といった空手に固執した名称は彼らの存在を表わす言葉であり、その根幹が空手である集団アイデンティティの表象であったと考えられる。

## 2. 現代武芸、テコンドーの始まり

戦後の空手道場は、その数が増したことに伴って日本の影響から脱皮し、空手の韓国化を求める動きが始まった。そのため、名称の創始、用語のハングル化、新しい型の制定など、脱空手現象が進行した。とはいえ、すぐに空手の影響から完全に抜け出すことは難しかった。

### (1) 崔泓熙とテコンドーの創造

#### 1) 崔泓熙によるテコンドーの命名

従来の空手を新しくテコンドーと命名することに中心的な役割を果たしたのは崔泓熙であった。彼は軍の将軍の立地であったが、「大韓跆拳道協会」を創立し、後にITFの初代の総裁になった人物である。

1945年以後、独立以前から活動していた各空手道場は主に民間のものであった。これに

---

<sup>28</sup> テコンドー新聞、1997年7月28日

<sup>29</sup> バク セドン、前掲書、p.15

対して崔は、戦前留学先の日本で空手を学び2段を取得していた経験を基に、独立と共に創立された韓国軍において、自身に指揮下にあった部隊で1946年から空手を教えていた。後の1954年には軍内初の空手道場「吾道館」を創設して普及に努めた結果、軍に崔の空手がより定着するようになった<sup>30</sup>。

こうした状況の中、テコンドーが公式の場に初めて登場したのは、1955年である。1955年という年号は崔の語のところに於いてだが、その年月日と委員会の名称などについては、異なる意見も見られる。

崔は、1955年4月11日、史学者や社会的著名人を招いて「名称制定委員会」を開き、その席で、テ（跆拳道）とコン（拳）の2文字を統合した名称に決したと述べている<sup>31</sup>。



〈写真8〉テコンドーの名称制定委員会(前列の左から3番目が崔泓熙)

<sup>30</sup> ジョン ジョンギョ、前掲書、p.30

吾道館は崔泓熙と彼の部下である南泰熙によって創られた。吾道館は青濤館の兄弟館ともいえるほど密接な関係を結んでいた。南泰熙を含めた多くの人が青濤館の出身であり、1954年から吾道館で館長職を務めた玄鐘明も青濤館の出身であった。

<sup>31</sup> 崔泓熙 1、前掲書、p.749

その時の写真として公開されている上掲新聞には「名称制定委員会」として参加した 11 人が写されている<sup>32</sup>。またそれと共に会議の内容も一部記されている。以下のようなものである。

#### 「名称制定委員会

写真説明：左から柳和青（米倉社長）、孫徳成（青濤館館長）、崔泓熙（第 3 軍管区司令官）、李亨根（連合参謀議長）、趙瓊圭（国会副議長）、丁大天（国会議員）、韓昌完（政治新聞社社長）、張京録（政治新聞社主幹）、洪淳浩（共益通商社長）、高光来（政治新聞社主幹）、玄鐘明（青濤館師範）

#### 会議内容

崔泓熙：テコンの意味について、その技術および歴史的見解を説明した。

#### ঞ（テ） 拳

柳社長（柳和青）：崔将軍が提唱した名称に全的に賛同する。しかし、名称を公言する事は重大なことなので、即座に決定するよりも、これに対する史的考察と合理的研究が必要と思われるため、この事については、一旦、有名な史学家達に依頼して、早期に崔将軍提唱の名称の検討を終え、その間に各自が他の名称を提案するなら、いくつかの名称を提示し、大統領閣下の裁可によって、公布すれば良いと思う。

趙副議長（趙瓊圭）：史的根拠と学的資料の収集のため 3 人小委員会を設け、その検討を今年 12 月 31 日までに完了し、各委員に個別に通知した後、この通知を受けた委員は一週間以内にこれに対する回答を行う。最終的には大統領閣下の裁可をあおぐことを決定する<sup>33</sup>」

今日で、上掲記事をもとにテコンドーの命名は 1955 年 4 月 11 日とするのが一般的となっている。

---

<sup>32</sup> 崔泓熙 1、同書、p.749 から抜粋したものである。だが、この新聞に関しては、東亜日報と伝わっているが、新聞が映した写真には委員の名前と会議の内容しか写されていないため、新聞名と日付は断定できない。また、東亜日報には同年同日にはこのような記事は載せられていない。

<sup>33</sup> 崔泓熙 1、同書、p.750 をもとに写真の内容を参考にした。

こうした主張の初見は、崔泓熙『跆拳道教本』（誠和文化社、1959）においてである。これはテコンドーの初めてのテキストであり、そこには「歴史的と技術に適合する名称を選択するまで、多くの苦勞と暗雲にさえぎられていたが、1955年開催された名称制定会議において決定を見た<sup>34</sup>」とテコンドーという名称の開始が1955であることを明らかにしている。また、彼の別の著書『跆拳道指針』（精研社、1966）には写真と共に1955年が明示されており<sup>35</sup>、さらに『跆拳道教書』（精研社、1973）には4月11日という日付<sup>36</sup>まで記されている。

しかし、こうした主張とは異なって写真の左下をみると、「4288.12.19.大韓唐手道青濤館 第1回顧問会」と記されていることが判る。4288年は西暦ではなく、韓国独自の紀年法である壇期の表記で、西暦では1955年のことであるが、日付は4月11日ではなく12月19日になっている。そして、「名称制定委員会」ではなく、「大韓唐手道青濤館 第1回顧問会」と書かれている。

これに関しては未だに解明されてはいない。どちらかが間違っていることになるが、もし写真が正しければ1955年12月19日、逆に崔泓熙の主張が正しいと1955年4月11日になる。

日付をめぐる議論の中で、李キョンミョンは、崔の『跆拳道教書』（1973）に、1955年4月11日に名称制定委員会で定められたとする記述と共に出された上記の写真の日付が異なることから、1955年4月11日は誤りであると述べている。さらに、崔泓熙の別の書である『テコンドーと私 1』（1997）には、李大統領からは最初テコンドーではなく、ハングルでテッキョンと称するように命じられていたが、1955年4月11日ようやく李大統領からテコンドーという揮毫を授けられたと日付の相違点を指摘した上で、しかし、大統領が崔にテコンドーの揮毫を与えた証拠も確認されないため、1955年4月11日という日を改めて否定している<sup>37</sup>。

また李キョンミョンは、李ホソンの『韓国武術米大陸を征服する』（スポーツ朝鮮、1995）に、「彼（崔泓熙）はテコンドーという言葉に権威を与えるために、名称委員会を構成し、

---

<sup>34</sup> 崔泓熙 2、『跆拳道教本』、誠和文化社、初版は1959年であるが、本稿では1960年の再版のp.33を引用した。

<sup>35</sup> 崔泓熙 3、『跆拳道指針』、精研社、1966、p.22

<sup>36</sup> 崔泓熙 4、『跆拳道教書』、精研社、1973、p.507

<sup>37</sup> テコンドー新聞、「李キョンミョン教授のテコンドー見直し12」、2001年11月5日

第1次名称委員会は（訳者注：1955年の誤りであると思われる）1954年12月19日に開かれた・・・この委員会は満場一致でテコンドー（テコン）名称を承認した」とする文をあげながら、テコンという名は1955年12月19日に「大韓唐手道青濤館 第1回顧問会」において定められたとするのが正しいと主張している<sup>38</sup>。

さらに李鐘祐も、テコンを表わす跆拳道の漢字は、崔がテッキョンをもとに造語したもので、李承晩大統領はこの漢字を書いて崔に与えたものではないと証言している<sup>39</sup>。

こうした指摘から名称と日付に関する問題を考えると、まず崔本人の証言が彼によって書かれた書籍によって異なっているため、写真が載っている新聞記事の方が現時点では最も信憑性が高いと判断される。

その上、写真が正しいものであるとしたら、崔はテコンドーが自身の仲間である「大韓唐手道青濤館 第1回顧問会」という狭い範囲で決められたものではなく、より客観的な「名称委員会」で国会議員や言論人を含む著名人らによって定められたとすることで、空手に新たにテコンドーとして、それまでなかった社会的公認性と権威を与えることを意図していたと考えられるのである。

また、テコンという語に決する前にテッキョンという語が推薦されたという説もある。当時の大統領であった李承晩が、1954年に1軍団創設4周年（29師団創設1周年）記念式典で崔が披露した空手の演武を見て、「これはテッキョンだ」と発言したというのである<sup>40</sup>。こうした李承晩の発言説の出典は明らかではないが、事実として用いられることが多い。

崔は、これについて以前のテコンドー教本では言及しなかったものの、1997年の『テコンドーと私 1』には、李大統領が「それは我が国に昔からあったテッキョンか？これで倒したね？テッキョンがいい。これを全軍に教えるべきだ<sup>41</sup>」と述べたとし、これに対して「私は前から心の中では新しい名前をテコンドーと決めていたが、独裁政権であったため機会を待っていた」と述べ、李大統領からヒントを得たが、すでにテコンドーという名は自分で考えていたと記し、以前とは異なる主張しているのである。

---

<sup>38</sup> テコンドー新聞、「李キョンミョン教授のテコンドー見直し12」、2001年11月5日

<sup>39</sup> 新東亜、「李鐘祐国技院副院長の『テコンドーの過去』衝撃的な告白」、2002年4月2日

<sup>40</sup> ジョン ジョンギョ、前掲書、p.32

<sup>41</sup> 崔泓熙 5、『テコンドーと私』第1巻、ダウム出版社、1997、p.335

そして、金容沃は『テコンドー哲学の構成原理』（1990）で、李承晩大統領が空手の演武を見て“テッキョン”と発言したのは、単純に彼の個人的な思い込みであったが、李承晩は大統領であったため、彼のもとに仕える崔は大統領の意見に従わざるを得なかった、と説明している。

こうしたテコンドーの命名に対する錯誤が生じている中、1956年7月26日の朝鮮日報に次のような記事が載った。

「来る29日にテコンドー（跆拳道＝旧唐手道）青濤館では、テコンドー第14回特別演武大会を本社後援のもとで29日午後5時から奨忠壇陸軍体育館で開催することになった。しかし、雨天の場合は8月5日に延期される。同大会は、特に大統領から名称をテコンドーに改めよとする親筆揮毫をもらっており、今回は改名記念として大会が開かれたということである<sup>42</sup>」

記事の文章からは第3者から聞いた話であるニュアンスが感じられるが、テコンドーという呼称は確かに1956年以前のことで、李大統領が親筆揮毫を与えるなどテコンドーの命名についてある程度の関わりを持っていたことは十分に考えられる。

テコンドーの命名経緯に関しては、資料の制約から本稿では特定することは避けるべきであると考えられる。

但し、テコンドーは戦後空手が主流であった韓国社会において、武芸の新しい概念として登場したことは間違いないことは改めて言っておきたい。

ちなみに当時の新聞（朝鮮日報、1956年7月26日）における表記を見ると、テコンドーは1956年に初出（但し跆拳道とハングルと漢字のする合成語であり、ハングル表記あるいは漢字表記のみとしての初出は1959年）するものの、その前後は空手道や唐手道の表記がもっぱら使われていたことを述べておく。

その後、1959年9月3日、全国支部の館長らが集まり、投票によって崔泓熙を代表とする「大韓跆拳道協会」が創立され、テコンドーという言葉が公式のものと、空手や唐手という言葉が次第に駆逐していった。

---

<sup>42</sup> これは、イム セボム、「近代テコンドー形成過程に関する研究」、ソウル大学大学院修士論文、2008、p.26の重引である。

しかし、当時まだ空手に対する意識が強かった各地の道場主にとって、テコンドーの名称は受け入れがたいものであった。黄琦は唐手道を、盧秉直、尹炳仁、李鐘祐などは空手道を主張して反対をした<sup>43</sup>。

だが、当時の崔は李承晩大統領と国軍を背景にした大きな権力を持っていたため、民間の組織の及ばない大きな影響力をもっていたと考えられる。そのため、崔が反対派の空手道場主の意見を無視して自身の考えを貫くことができたと考えられるが、その一方的な力関係が原因して、その後、崔泓熙対反空手道場主という対立構造が作られることとなった。

## 2)空手の影響とその脱皮

崔らによって新しく命名されたテコンドーであったが、全てが彼1人による創作ではなかった。崔は自身書いたテコンドーテキストにテコンドー起源の背景について次のように述べている。

彼による最初のテキスト『テコンドー教本』（1959）では、テコンドーは、テッキョンという名で新羅時代から始まったが、日本の植民地時代にはその姿をほとんど消し、しかし日本人はそれを空手道と呼んで実践した。そしてテコンドーは空手道として独立後も続けられたとされる。そして『テコンドー指針』（1966）では、上記の歴史に続けて、テコンドーは中国の拳法とは技術的に全く違うものであり、またテコンドーは新羅から始まるため、1921年から始まった日本の空手道とも年代的に違っていると述べ、日本の空手との差異性を強調している。

そして、1972年『テコンドー教書』では、新たに彼自身の研究によって科学的に体系化されたものがテコンドーであると述べている。

要するに2000年『総合本テコンドー』以前に書かれたテキストでは、日本の空手からの影響を全面的に否定している。以下はこの本に書かれたテコンドーが創られた背景とその理由である。

「テッキョンの特徴である足技とスバッキ（手搏戯）の長所である手技、そして『カラテ』（原文：カラテ）技術を参考にし、あらゆる同様の武術も決して追従を許さない変化無双の動作と妙技を研究体得すると同時に、体重の大小

---

<sup>43</sup> シン ジャンホ、『韓国テコンドーの近代化過程に関する研究』、壇国大学大学院修士論文、2007、p.30

に拘わらず、老若男女の誰もが練習によって体得できる蒼軒流のテコンドーを完成し、全世界に紹介した。・・・私がテコンドーを創始できたのは、過去、我が国が不幸にも 36 年間、日本の植民地になり、私自身が日本の『カラテ』を覚えたことによる・・・1946 年 3 月、強い軍隊の育成を目標に、全中隊に『カラテ』を教えた。その時から、精神面、技術面において『カラテ』より優秀な民族の武道を編み出し・・・テコンドーは東洋の倫理道徳を含み・・・また私の人生観が含まれているので、『カラテ』やテッキョンは多少参考になったが、それらとは全く異なる原理と理論によって研究され体系化された、独自の武道であることをここで明らかにしておく<sup>44</sup>」

このように崔はテコンドーについて、空手より優れた武芸を創ることを目的に、韓国の古来武芸であるテッキョンと手搏を元に日本の空手を参考にして創ったこと、そして、韓民族の武芸として、また軍隊を強くする目的をもって意図的に創られたものであったことを明らかにしている。

こうして彼自身もまだ日本の空手の影響から完全に抜け出していない状況の中で、周りの反対にも関わらず、なぜテコンドーという独自の武芸を創ろうとしたのか。このことを考えるについて、当時の韓国の社会状況との深い関係を見なければならない。

当時の韓国は、日本に 36 年間の支配を受けた直後であったため、まだ社会全体が不安定な状態にあり、植民地時代に関わったさまざまなものを完全に排除することがまだできなかった。そのため、韓国政府は日本に支配されたことを国の恥として、日本植民地時代に影響を受けたもの、いわゆる「倭色」と言われる日本の文化を取り除くことが最優先の先決課題とされた。

だが、柔道と剣道を始めとする武道種目は、独立前から警察の訓練科目や学校の体育科目として行われたことと、それらが当時の日本留学エリート階級の中で普及していたこともあって、すでに 1 つの運動文化として定着していた。そのため、独立後にもそのまま維持されることができた。そして、空手も無視されることなく民間を中心にカラテやダンスという音読みの名称で行われ続けた。

しかし、崔は韓国政府が自立を目指している中において、民間の町道場ではなく韓国軍、

---

<sup>44</sup> 崔泓熙 1、前掲書、pp.23~24

すなわち大きな国家組織の重要なポストの一員であった崔にとっては、日本文化の残存である空手を、そのまま使うには立場的に困難であったと考えられる。それ故、空手との関連性を否定しながら、テッキョンと手搏を元にした韓国のオリジナル武芸を創るに至ったと考えられる。

そして、李承晩政権という権力を背負っていた崔にとっては、上官であった大統領が反日に強い意志を示していたため、それに反することはできず、むしろ李大統領の意志に従わざるをえない状況であったと考えられる。

また、「建国後、政府は韓国のナショナル・アイデンティティをどこに置くかという議論のなかで、この韓民族スポーツにアイデンティティを代弁させ、新しい時代の韓国のあり方を構築していこうと考えていた。そうした意図から政府は、伝統文化を国民的なものと意味づけ、国民文化の象徴に持ち上げていったのである。つまり、民族意識の高まりのなかで民族スポーツに注目し、民族のアイデンティティの再生産を民族スポーツによって実現しようとした<sup>45)</sup>」という意図も含まれていたと考えられるが、この点、テコンドーについて以下に取りあげる。

## (2)初期テコンドーの型の制定

韓民族の新しい武芸を創り出そうとした崔泓熙の意識的な行動にも関わらず、彼自信が日本の空手をモデルにしたため、創られたテコンドーの型もそのほとんどが日本の空手の型の変形であった。

1) 「型」 稽古は韓国に移入された空手の主な練習法であった。その型の練習について、哲学者の金容沃は、「60年代初め、私が経験したテコンドーの特質を要約すると次のようである：私が学んだテコンドー（＝唐手）は徹底的に型中心であった・・・型とは絶対的なものであり、工夫の程度（the degree of kung-fu）はもっぱらこの型の段階によって決定され、そしてその段階は決して跳び越えることのできないものであった。型の習得は一段一段行われるものであって、見えるからと言って何段も先の人が行っているのを真似すると大変なことになるものであった。型の内にはすべての工夫の神秘と権威が潜んで

---

<sup>45)</sup> 李承洙、「創られた韓民族スポーツ」、早稲田大学大学院博士論文、2003、p.162

いて、また型の段階の差は実戦の能力差を表していると思っていた<sup>46)</sup>と述べている。

また、講徳院の 2 代目館長であったパク チョリは、「その当時、修練法は主に型であった。修練場の裏側に巻きわらを作り、蹴りの鍛錬も多くやった<sup>47)</sup>。そして、青濤館の師範であった玄鐘明も、「当時の修練は対錬（試合）より、型あるいは試割りを主にやった<sup>48)</sup>」と証言している。

このように型は初期韓国の空手において重要な練習法であり、流派の根本となる技の体系として重んじられた。

2) テコンドーの型が初めて紹介されたのは 1959 年のことである。1959 年 10 月 30 日に刊行された『跆拳道教本』にテコンドーの型が初めて掲載されたのである。これは「大韓跆拳道協会」（同年 9 月）が創立されて間もなく出版されたものであり、統合直後のテコンドーに関して書かれていると考えられる。

テコンドーは、元々多くの流派に分かれていたため、型の種類は多い。本来型というものは、知って練習して完全に自分のものとする以外、必要ないものである。それ故たくさんの型を覚える必要はなく、覚えた型は試合を通して自分のものにするのが大事であると説明された。

そして、以下の 3 つの流がテコンドー型として載せられている。

「小林流：太極（1 型～3 型）、平安（1 型～5 型）、拔塞（大・小）、観空、  
燕飛、岩鶴  
昭霊流：鉄騎（1 型～3 型）、十手、半月、慈恩  
蒼軒流：花郎、忠武、乙支、三一、忠壯」

しかし、実際には、小林流と昭霊流は古い日本の空手流派の名前であり、両方とも沖縄空手の源流的な存在であって、小林流は首里手系、昭霊流は那覇手系の流れであった。

次は、現在の松濤館空手の型である。

---

<sup>46)</sup> 金容沃、『テコンドー哲学の構成原理』、1990、pp.68~69

<sup>47)</sup> テコンドー新聞、1996 年 12 月 2 日

<sup>48)</sup> テコンドー新聞、1966 年 12 月 9 日

「太極（初段・二段・三段）、平安（初段・二段・三段・四段・五段）、拔塞、  
観空、燕飛、岩鶴、鉄騎（初段・二段・三段）十手、半月、慈恩、天之型（組  
手型、表・裏）、松風<sup>49)</sup>」

このように両方の型の名称がほとんど一致していることが判る。ただ名前が一致しているだけではテコンドーの型と松濤館の型が同じであるとは断言できないが、当時の青濤館の李元国と松武館の盧秉直はかつて日本の松濤館の船越義珍から空手を学んだとされており、テコンドーを創造した崔泓熙も青濤館と協力的な関係を維持していたことから、松濤館系の型の影響を受けた可能性が高いと考えられる。

またこの教本には崔泓熙自身が創ったとされる蒼軒流の5つの型も載せられている。

こうして、崔泓熙が独自に創ったとされる蒼軒流の型が入っていることには、日本の影響から脱皮しようとした彼の意志をうかがうことができる。しかし、テコンドーの前身ともみなされるテッキョンの影響がテコンドーの型に見られないこと、そして基本的な技術体系が空手をモデルにしていることなどから、テコンドーには当時まだ日本の空手の影響が多く、まだ完全には韓国化していなかったと言える。

このようにテコンドーは移入された日本の空手のみで成り立ち、伝統武芸のテッキョンやその他の武芸を参考にしなかった。こうした形成過程は、その後、対内的には歴史的な伝統性を確保すべきこと、対外的には日本の空手との競争の中で、韓国の武芸としての技術的な固有性を主張しなければならないという課題をもたらした<sup>50)</sup>。

そして、伝統武芸のほとんどが消滅した韓国社会に、新しい武芸をもたらした点は評価されるものの、そのようにして無批判に伝統武芸を創ってしまったことが、元にあった武芸を復活することを逆に困難にし、そして、起源や歴史を日本の武道とは無関係と主張しなければならない状況を作り出しているのである<sup>51)</sup>。

**3)1961年、崔の後輩にあたる朴正熙による5・16軍事クーデターが起きた。これまで**

---

<sup>49)</sup> 日本空手道松濤会、<http://www.shotokai.jp/japanese/keiko/kata.html>、2010年3月7日

<sup>50)</sup> 楊鎮芳、「解放以後、韓国跆拳道の発展過程とその歴史的意義」、ソウル大学大学院修士論文、1986、p.18

<sup>51)</sup> 金光成、「解放を前後にしたテコンドー系譜の人物と品勢の変化」、龍仁大学論文集、1990、p.10

李承晩政権を背負って権力を振っていた崔泓熙は、朴正熙との対立によって軍職を辞し、大韓民国初代のマレーシア大使になった（1962）。そのため、前のようにテコンドー界で影響力を振ることはできなくなった<sup>52</sup>。

そして、クーデターの最高組織であった「国家再建最高会議」が布告令第 6 号を下し、「文教部」に登録されていた団体登録が無効になったため、新しく登録する必要が出てきた。その結果、それまでの「大韓跆拳道協会」は「大韓跆拳道協会」（1961 年 9 月 14 日）に改名され、62 年には大韓体育会に正式に加入することになった。

この跆拳道という名称について、崔泓熙は跆拳道を主張したが、彼の影響力は昔ほどではなく、他の道場の館長らの反対によって、結局、跆拳道の「跆」と空手道の「手」を 1 文字ずつ取って、跆拳道になった<sup>53</sup>。

「大韓跆拳道協会」の時代には、まだ「館」と呼ばれた空手や唐手の道場が存在した。そして、道場ごとに型や技術体系が異なっていて、そのために道場間で競技を行うのは大きな問題であった。それ故、型・試合・試割りなどの道場差をなくすため、審査代表団が構成されていた<sup>54</sup>。

その後、1962 年 11 月 11 日「大韓跆拳道協会」になって初めて「第 1 回全国昇段審査大会」が開かれ、初めて公認の段が発給されることになった。

審査種目は型、試合、論文（3 段以上）であり、試合は防具（胴体・すね・拳）をつけて行う。審判は主審 1 名と副審 4 名、陪審 2 名で構成、主審は勝負の判定と試合の進行を、副審は採点と勝負判定を表示、陪審は主審と副審の判定を監督する。試合場は 8m×8m の四角形、試合時間は 1 分 30 秒などが定められた。また型の審査は、応募者が申請する段の指定型の中から選んで 2 種類について行われた<sup>55</sup>。

以下はその年の審査で行われた 5 段までの指定型の種類である。

「初段指定型：平安 5 段型、鉄騎初段型、内歩進初段型、慈院型、花郎型

2 段指定型：拔塞型大、鉄騎 2 段型、内歩進 2 段型、騎馬 2 段型、忠武型

---

<sup>52</sup> テコンドー新聞、1997 年 8 月 18 日

<sup>53</sup> ジョン ジョンギユ、前掲書、p.41

<sup>54</sup> テコンドー新聞、1997 年 10 月 13 日

<sup>55</sup> テコンドー新聞、1997 年 10 月 20 日

3 段指定型：十手型、拔塞型、燕飛型、短拳型、鷺牌型、階伯型、乙支型

4 段指定型：鉄騎 3 段型、内歩進 3 段型、慈恩型、鎮手型、岩鶴型、鎮東型、  
三一型、長拳型

5 段指定型：公相君型、観空型、五十四歩型、十三型、半月型、八騎拳型<sup>56</sup>」

上掲の型は、先の『跆拳道教本』の中で検討された、太極、平安、拔塞、観空、燕飛、岩鶴、鉄騎、十手、半月、慈恩、花郎、忠武、乙支、三一（忠壯は除外）を含んでいる。そして、その他に内歩進、騎馬、短拳、鷺牌、鎮手、鎮東、長拳、公相君、五十四歩、十三、八騎拳、慈院、階伯という型が追加されていた。（階伯は蒼軒流型）

しかし、型の多くは日本の空手に見られるものであった。つまり初期のテコンドーは協会を通して統合と一元化を進める努力を行っていたものの、型についてはまだ完全に独立させることができていなかったことがみてとれる。そして、技術的に日本の空手から多くの影響を受けたことは否定できない事実であると考えられる。

一方で、崔は独自の技を創造しており、それらは 1962 年の審査会で採択された「花郎、忠武、乙支、三一、階伯」の 6 つの型である。

さらに、崔は自身の 1965 年英文版テコンドー教本をハングルに直し、1966 年 5 月に出版した『跆拳道』（陸軍跆拳道部）では、掲載していた日本の小林流と昭霊流の型は記述せず、彼の蒼軒流の型だけが記されている<sup>57</sup>。この本は彼が、軍隊にテコンドーを普及させるために書いたと思われるが、その型は、

「天地、檀君、島山、元暁、栗谷、重根、退溪、花郎、忠武、廣開、圃隱、階伯、庚信、忠壯、乙支、三一、崔瑩、古堂、世宗、統一」

となっており、型の数は、花郎、忠武、乙支、三一、忠壯、階伯の 6 つから 20 に増えている。そしてその型名も韓国の歴史に登場する偉人などの名称に因んだ名がつけられていた。

---

<sup>56</sup> テコンドー新聞、1997 年 10 月 13 日と 20 日

<sup>57</sup> ジョンテコンドー、<http://cafe.naver.com/taekwondo119>、2010 年 4 月 13 日

また、1972年の崔の『跆拳道教書』（精研社）では、さらに文武、淵蓋、西山、義菴の4つの型が加えられ、これらがITFの型として現在に至っている。

### (3) テコンドー型の変遷と確立

1964年マレーシア大使の職を終え戻った崔は、65年、「大韓跆拳道協会」の第3代会長に就任し、そして再び協会名を「大韓跆拳道協会」に戻した。

その時期に始まったのがテコンドーの型を新たに制定しようとする動きであった。当時はテコンドー協会の型と崔が導いている蒼軒流の型が対立していた時期であった。

しかし、型の対立に止まらず、テコンドー界の権力関係までが対立していた。崔は協会を独断的に運営していると不満の声が上がっていた。テコンドーの名称変更の際にも、多数の反対にも関わらず、将軍時代の力を利用して協会に圧力をかけたこともあり<sup>58</sup>、崔に協会と融合する様子は見えなかった。結局、崔は就任1年で協会の理事会によって会長を下ろされることになった。

こうしてテコンドー協会と崔は互いに独自の道を歩むようになるが、テコンドーが追及していた、日本の空手から脱皮して韓国のオリジナル武芸として再構成するという動きについては、崔が先行した。

---

<sup>58</sup> テコンドー新聞、1997年10月27日

	初期跆拳道	1967年制定	1975年から現在	1966年、蒼軒流
1	太極	八卦 1	太極 1	天地
2	平安	八卦 2	太極 2	檀君
3	鉄騎	八卦 3	太極 3	島山
4	拔塞	八卦 4	太極 4	元曉
5	十手	八卦 5	太極 5	栗谷
6	公相君	八卦 6	太極 6	重根
7	明鏡	八卦 7	太極 7	退溪
8	岩鶴	八卦 8	太極 8	花郎
9	鎮手	高麗	高麗	忠武
10	五十四歩	金剛	金剛	廣開
11	半月	太伯	太伯	圃隱
12	慈恩	平原	平原	階伯
13	燕飛	十進	十進	義菴
14	内歩進	地胎	地胎	忠壯
15	騎馬	天拳	天拳	古堂（後, 主体）
16	短拳	漢水	漢水	三一
17	鷺牌	一如	一如	庚信
18	十三			崔瑩
19	鎮東			淵蓋
20	長拳			乙支
21	八騎拳			文武
22	慈院			西山
23				世宗
24				統一

〈表2〉テコンドーの型の変遷<sup>59</sup>

<sup>59</sup> この表の初期テコンドーの型は、59年の崔泓熙の『テコンドー教本』と62年の昇段審査会での審査項目をもとに、著者朴が作成したものである。他の型が存在した可能性もある。

1962年に行われた第1回昇段審査会での型はそのほとんどが空手の型であったことについては、前述した。だが崔は1966年、それとは別に独自の名称を使った蒼軒流型を完成させた。そして、その翌年に協会も17の新しい型を完成させた。その協会の型も前の名称とは全く異なったもので、そして注目すべきは62年の昇段審査会で実施されていた蒼軒流の型は全て排除されたことである。

その後1972年に崔が、唯一のテコンドー国際組織であるITFと共にカナダに亡命したことによって、協会は1973年に韓国を中心とするテコンドーの国際組織WTFを創立し、1975年にさらに従来型の型を整備してWTFテコンドーブンセ(型)として現在に至っている。

このように、テコンドーの型の制定は、協会と崔によって行われた。その過程で、協会は1969年テコンドー用語の表記をハングルに直し(71年に補正)、1972年には型も「ブンセ: 품세<sup>60</sup>」というハングルで発表した。他方、崔も型をハングルの「トゥル: 틀」に直し対抗した。トゥルは朝鮮半島で漢字が用いられる以前から使われていた言葉で、「型」を意味する。

ここで崔がすでに型やブンセとする用語があったにも関わらず、トゥルという用語を用いたのは、テコンドーに対する彼のオリジナリティ意識の現われであり、テコンドーを韓国化しようとする国守主義的な考えが窺えるところである。

このように型という技術分野での韓国化の努力は、外面的に日本の空手との差異を主張できるようになったとする意識をもたらしたが、型という技術類型を捨てられず、むしろ型に執着する性向を見せたことで、より根本的な面において日本の空手からめとられてしまったともいうことができる<sup>61</sup>。

崔や協会が創ったとする新しい型は、型の韓国化とは言えるものの、しかしその多くが空手の型を分解し、組み立て直した物に過ぎなかったようである<sup>62</sup>。

その後、崔は、1966年ベトナム、マレーシア、シンガポール、西ドイツ、アメリカ、トルコ、イタリア、エジプト、韓国を含めた9カ国の同意を得て、ITFを創立し、初代の会長になった。しかし、崔は、大統領になった朴正熙(1963年に当選—1979年暗殺)との

---

<sup>60</sup> 1987年、품세から품세へ文字の変更を行う。読み方は同様。

<sup>61</sup> 楊鎮芳、前掲書、pp.21~22

<sup>62</sup> 楊鎮芳、同書、p.22

政治的葛藤<sup>63</sup>により 1972 年、ITF と共にカナダに亡命をすることになり、以後韓国に戻ることはなかった。

その後の韓国におけるテコンドーの歴史は、したがって WTF を中心とするものである。

## 第 2 節 テコンドーの体系化と国際化

### 1. テコンドーの競技化

1960 年代、特に 62 年から 65 年までの間に「大韓跆拳道協会」によって競技化が進められた。1962 年「全国体育大会」において初めて演武を行い、1963 年には大韓跆拳道の競技規定が定められて、同年の第 44 回全国体育大会では正式種目として初参加した。そして、大韓跆拳道協会から大韓跆拳道協会に改名した 1965 年には、第 46 回全国体育大会に参加すると共にその他の大会を 5 回開いた。1966 年には「第 1 回大統領旗跆拳道団体戦」を開くなど、テコンドーの競技規模は大きくなり始めた。

しかし、テコンドーの競技化に対しては反対の意見も多かった。特に崔はテコンドーの競技化は、テコンドーの 3 要素である形、試合、試割りの中の試合のみで勝負を決するため不合理であり、さらに競技中の防具の使用は完全な技を發揮しにくくするとの理由で競技化に積極的に反対した。そして、武徳館の黄琦も武術は人間の命を直接的に対象にするためこれを試合によって行うことはできない、また競技化によって技に根本的な変容が起きるため慎重であらねばならないと主張した<sup>64</sup>。

だが、このような彼らの意見より、テコンドーが発展するためには現代的なスポーツとして展開する必要があるとの認識が勝った。

最初に導入されたのが競技ルールの制定であった。合理的なルールはテコンドーをスポーツ化するのに不可欠であり、ルールによって競技に公正性がもたらされ、また競技者の安全を守り、競技運営を効率的にすることができる。

---

<sup>63</sup> 当時大統領であった朴正熙は、長期集権を目的に、1969 年大統領を 3 回までできる所謂“3 選改憲”を国会で通らせた。崔泓熙はそれに反対し朴正熙と対立するようになり、韓国での基盤がなくなった。

<sup>64</sup> ジャン テホ、前傾書、p.42

さらに、娯楽性もスポーツの重要な要素であるとして、安全性を維持しながらも競技をより面白くするためのルールが考えられた。そこで問題となったのが、日本の空手で使っている寸止め方式であった。寸止めによる判定は全て審判の主観的な判断に依存するため競技の客観性が保証されないし、打たずに止める方式はスポーツとして限界があると判断された<sup>65</sup>。

そこで考えられたのが防具を使って戦う完全打撃方式であった。技術的には手技より足技をより多く使われるルールを制定し、より興味深くするために打撃部位を胴と頭とする得点制の導入し、より華麗な足技を使えるようにしたのであった<sup>66</sup>。

こうした空手という外来文化を変容させて土着化する過程でテコンドーは、武芸性より競技性を優先させることで、空手が持っている形文化を否定し、組手式の競技として再生した。

テコンドーはこうした競技化を進めたことで、それまでの空手の垂流という認識から脱皮し、韓国独自の武芸であるとの意識をもたらすことに成功した。

## 2. テコンドー組織の統合と国際化

1971年、「大韓跆拳道協会」の会長として金雲龍（元、IOC副委員長及びWTO総裁）が選ばれた。彼はテコンドーを国技として育て、国外でのテコンドーによる国威宣揚を目標とした。そしてその考えをもって、1972年に全てのテコンドーの中央道場と呼ばれる「国技院」（World Taekwondo Headquarters）を建立した。国技院はその翌年から第1回世界選手権大会、74年に第1回アジア選手権大会、75年に世界選手権大会などの大会を開くなど韓国を盟主とするテコンドーの国際化を進めた。

一方、国内でもテコンドー団体の整備が進められた。当時は大韓跆拳道協会が中心的な役割をしていたが、その傘下にはまだ「館」と呼ばれる個別の組織が存在し、その間の派閥問題などがテコンドー発展の障害として指摘されていた。協会は1974年に40余りの館を9にまとめることで、組織の統合を開始した。当時テコンドー界には9の館の傘下に3千余りの道場があり、有段者は10万名に至っていたようであった。1976年には従来の館

---

<sup>65</sup> ジャン テホ、同書、p.43

<sup>66</sup> ジャン テホ、同書、p.43

名を廃止し、数字を使って協会直轄を表示するようになった。1 館・松武館、2 館・韓武館、3 館・蒼武館、4 館・武徳館、5 館・吾道館、6 館・講徳院、7 館・正道館、8 館・智道館、9 館・青濤館、さらに武徳館を脱退した人が設けた 10 館・管理館である。そして、1978 年には 10 館全てを廃止することになった<sup>67</sup>。

このようにテコンドーは、スポーツによる国際交流と共に誕生間もない韓国という国を世界に知らせることを目標にしていたため、早急に国内の複雑な組織を一元化する必要があった。一部に不満の声があったものの、協会は一元的な運営体制を目指したのである。

そうした中、崔が政治的理由で、1972 年に ITF と共にカナダに亡命する事件が起きた。それをきっかけに金雲龍は 1973 年にフランス、香港、台湾、カンボジア、アメリカ、マレーシア、シンガポール、アイボリー・コースト、ボルネオの代表と共に WTF という国際組織を起し、国際的活動のための新しい体制を整えた。

勿論以前から崔による国際的活動は行われていた。1959 年に「国軍跆拳道演武団」は初めてベトナムと台湾を訪問、65 年英語版の『跆拳道教本』発刊、65 年にはヨーロッパ、中央アジア、東南アジアを巡訪、68 年国際軍人体育会シンポジウム参加など<sup>68</sup>、テコンドーを国際的な場に持ち込み、その領域を広げようとした。

こうした活動を基に WTF は国際化を進め、1975 年に IOC が管轄する「国際競技連盟」に加入することになった。これはテコンドーが国際的スポーツとして認められた証しであり、従来開かれる諸種の国際大会でテコンドーが正式種目として採択される可能性が高くなったことを表している。世界のテコンドー界に占める世界テコンドー連盟と盟主である韓国の役割はより大きくなった。

さらに、「国技院」の方はテコンドーの中央道場という立場から、全世界のテコンドー修練人に対する昇段業務を行う唯一の機関として、テコンドーのシンボリック的存在となった。

テコンドーは国内の分裂していた諸団体が統合されたことによって、“韓国のテコンドー”として発展することができ、71 年に朴大統領から“国技テコンドー”の後盾を得ることで韓国の国技という権威を手に入れることができた。そして、空手とは異なる安全性を配慮した競技ルールを編み出したことで、国際社会に受け入れられた。

このように韓国生まれの国際スポーツ「国技」テコンドーという図式を表に出している。

---

<sup>67</sup> ジャン テホ、同書、pp.34~37

<sup>68</sup> 崔泓熙 1、前傾書、pp.751~754

それは、「テコンドーは固有の韓国文化の所産である」（世界テコンドー連盟規約、25 条 85 項）こと、国際試合用語としては韓国語を使用しなければならないこと、そして昇段は韓国の国技院を通さなければいけないことを定めたことにも現われている。こうしたことから、テコンドーを韓国由来としてその独自性を保ちつつ、テコンドー国際社会を韓国がリードしようとする意図がうかがえる。

## まとめ

テコンドーの始まりは、独立後、日本の植民地期に空手を習った人物たちの工夫によるものであった。当初は、テコンドーという認識はなく空手（ゴンス）あるいは唐手（ダンス）などと呼ばれていた。

しかし、1948 年の大韓民国建国とともに、日本の影響を脱して、独立国家として自立することを最優先の課題とした国家政策の中で、空手も例外ではなく 1955 年韓国軍の将軍であった崔泓熙を中心に、「跆拳道」という新しい武芸として再考案された。

だが、名称が変わっても担い手の意識は変わらなかった。実際の型や修練体系は空手を踏襲しており、空手の影響から完全に抜け出すことは難しいことであった。

テコンドーが空手の影響から離れ始めたのは 1960 年代からであった。従来の型中心の修練法から足技を使う競技中心に変えることで、テコンドーの独自性がもたらされた。そのため防具の開発や競技ルールの整備が進められ、空手とは全く異なる新しい競技スポーツとしてのテコンドーが誕生した。

テコンドーは、今日、長い歴史を誇る韓国伝統武芸として知られているが、実は独立後に創られた武芸の、最初のモデルであったのである。